

## ○竹山 武志 氏（平成 28 年、息子（当時 4 歳）を交通事故で失う）

[要旨]

### 子どもをなくした苦しみの中で

平成 24 年 2 月 10 日生まれ、竹山杏里(かずさと)、とても可愛い子でした。杏里は四歳の誕生日を迎えたばかりでした。平成 28 年 3 月 20 日、現役の陸上自衛官の脇見運転によって殺害され、一瞬の過ちによって命を奪われて、人生を終わらせられました。自宅前の道路を手を上げて横断中に、次男の目の前で、車にぶつけられました。車を運転していたのは隣の部落の人で、中学の PTA で一緒でした。湯布院駐屯地の自衛官で三十数年車両運転していた人ですが、うちの畑の菜の花に見とれ、ノンブレーキの状態でぶつけたということでした。次男が「杏里が車にひかれた」と叫びながら私を呼びに来ました。たぶんいるはずだろうと思ったところへ駆けつけたら、はるかかなたのほうに飛ばされていました。後から知ったのですが、衝突場所から 43 メートルだったのです。その瞬間、無理かもしれないと思ったのですが、生きていることを信じて救急車に乗りました。搬送された病院で、生きようと頑張ってくれましたが、3 時間後、亡くなりました。

私はこの子が亡くなったときには立ち直れないと思いました。なぜ自分が生きているのかという思いの中、仏教や哲学に救いを求めました。お釈迦様の教えに、生きる苦勞、老いる苦勞、病む苦勞、最後には死ぬ苦勞という生老病死の四苦と、愛する者と別れなければならない愛別離苦、憎い者と出会わなければならない怨憎会苦、求めても得られない求不得苦、そして五蘊盛苦の 4 つを足して四苦八苦があります。生老病死は、間違いなく、私たちが会える苦しみですが、今回の事故はあとの八苦のほうです。愛別離苦は、最愛の目に入れても痛くない、この子が一瞬にして亡くなったことです。怨憎会苦とは、加害者が 1 キロ先に住んでいるので、会い続けなければいけない。もう一つ、求めても得られない求不得苦。この子のことを生き返らせてくれといっても、これはもう叶えられない。生き残っている親は苦しみもがいていますが、しかし、逝ったあの子は病む苦しみも、老いる苦しみも、死ぬ苦しみも感ずることなく、まったく経験することなく、あの世にいったのではないか。でも痛かっただろうなと思います。仏教では、抜苦与樂、苦しみを取り去って樂しみを与える、という考え方があります。私も苦しみをできるだけ抜いて、杏里と共に生きていけたらなと思っています。

### 写真集『生きているってすばらしい！！』

杏里はとても可愛かったので、親馬鹿で申し訳ないですが、この子の元気だった姿を、そして生きた証をみなさんに見てもらいたいと思って写真集を作りました。題名は『生きているってすばらしい！！ーぼくをわすれないで 杏里の千五百日ー』と付けました。杏里の人生は、1,500 日でありました・・・。

「その日は、菜の花がきれいに咲いていて、希望の黄色が広がる、楽しいばかりの春でした。

あまりにも突然で、あまりにも早すぎる別れが与えられ、当たり前が最上の幸せであった、生きているということが何よりすばらしいのだ、と気づかせていただくことになった、忘れられない春となりました。」

杏里は何も残していないんです。でも、この子が生きていれば、どれだけ多くの人に会えたのか、どれだけのことをしたのかという思いで、何か残してあげたいとこの写真集を作りました。私たちの願いのひとつはこの本を見て、皆さんも、明日、被害者になるかもしれない、加害者になるかもしれないと、交通安全ではなく、交通危険を少し意識しながら日々過ごして頂くことです。

### 意見陳述書(残された子どもの状態)

子どもの支援に関して、今、民事裁判の最中なのですが、意見陳述書に書いたことを紹介します。

道路に倒れ傷だらけ血まみれになっている弟の姿を、子どもたちは泣きながら声を掛け続けていました。

長女は杏里の面倒をよくみて可愛がっていました。高校の合格が決まった数日後に杏里の事故でした。高校に入学し、入学の喜びを書くであろうはずの作文に書いた文章は、「死」についてでした。「弟の死について振り返り、命があまりにもはかないものだ、死が自分たちの身近にある、特別なものではないということ、死は生きているものなら絶対に身に起こることだと改めてわかった気がします。」事故の後、救急車のサイレンを聞いたり、加害者や加害者の家族の姿を見ると吐き気がするといい、夢にうなされることがあるようです。

長男は杏里とよく遊んでくれました。事故が起きてから一人で悩んでいましたし、親に心配をかけまいと、気丈に振る舞っていましたが、写真集を見ながら泣いている姿をよく見かけました。事故の2日後が小学校の卒業式でしたが、どうにか気持ちを切り換えてしっかりとした姿で立派でした。中学校に入って、モラロジー研究会に投稿した文章があります。

「命。僕は今年の3月に、一番下の弟を交通事故で失いました。今まで当たり前だった日常は一瞬でグチャグチャになりました。そのとき、支えになってくれたのは家族でした。みんなで泣いて、みんなで悲しんで、みんなで話し合い、また笑うことが少しずつできるようになりました。家族がいてくれることをありがたく思いました。僕はこんなにも簡単に、それも一瞬で命が消えていくこの世の中を許せません。それと同時に、こんな世の中を変えたいと思います。子どもから大人まで、すべての人に改めて知ってほしいのです。命とはいつ、どこで尽きるかわからないこと、そしてかけがえのない家族の大切さを。生きているってすばらしいということ。」

次男は事故を目の前で見せてしまいました。「僕があそこにいたからカズ君が来た。自分のせいだ」と思いつめ、その道路を渡ったり、車に乗るのを怖がるようになりました。お葬式で「カズ君、ごめんなさい、カズ君、ごめんなさい」と何度も言っていました。そんな思いをさせてしまったことを親としても申し訳なく思っています。

三男は6歳で、生まれたときからずっと杏里と一緒にいました。事故が起きたときは、「僕がちゃんと見ておけばよかった」と繰り返し、私や妻に言っていました。お葬式のときの別れの言葉は

「僕がちゃんと見ていればよかったです。バイバイ、カズ君」です。まだ死を理解できていないのかもしれませんが。亡くなってからも「カズ君、どこ？」と沓里を探すことがよくありました。

次男と三男は毎朝のお勤めとして沓里の仏壇の水をかえ、お線香をあげて、手を合わせていますが、長女と長男は事故を思い出すのがいやなのか、今は仏壇に手を合わせることはほとんどないです。それぞれ受け止め方が違うのだと思います。

去年末、喪中の葉書を出さなければと準備を始めました。私は非常に交遊関係が広いものから、年賀状を2000枚くらい書くんですね。沓里の事故の事を、喪中の葉書で知らせるのは、つれないなと思ったので、「交通安全の祈りを込めて」という形のパンフレットを作らせて頂きました。喪中の葉書の代わりに皆さんに事故の内容と交通安全の祈りを込めた文章と、沓里の可愛い写真入りのパンフレットを送らせて頂きました。開いた面には、私が一番好きな、別府の実相寺にある竹細工伝統産業会館のロビーの前で撮った写真を使わせて頂きました。「おだやかなころでありますように」と安全運転の願いを込めました。

今後の事なのですが、私はこの子と共に生きて、被害に遭われた方とか、悩んでいる方とかに、この事故の経験を活かしてボランティアや支援ができればいいなとは思っていますが、まだ民事裁判の最中なものでして、それがどこまでできるかというところで悩んでいるところもあります。みなさん、この子のことを忘れないでやって下さい。交通事故はすべての人に起こり得るのだと沓里は身をもって教えてくれました。加害者にも被害者にもならない様にして頂きたいです。お互いがおもいやりを持って、おだやかな心で前を向いて、運転・通行していれば、ほとんどの交通事故は、防げるものだと思います。

みなさんの安全運転、交通安全を心より祈っております。